

G・ベイトソン『精神の生態学』

「フリミティブな芸術の様式と優美と情報」(pp.198 - 231)

1. 序 (pp.200-201)

序章では、優美の説明と本章の中心的問いについて述べられている。優美については以下の3点。

a. 優美について

- 人間は「優美さ」を失った。その優美の部分的回復を目指すものとして芸術を位置づける
- 「優美」には階層性がある
- 「優美」＝魂の部分間の統合＝一方の極を「意識」、もう一方の極を「無意識」とする精神の多重レベル間の統合＝「情感の理」と「理知の理」の統合

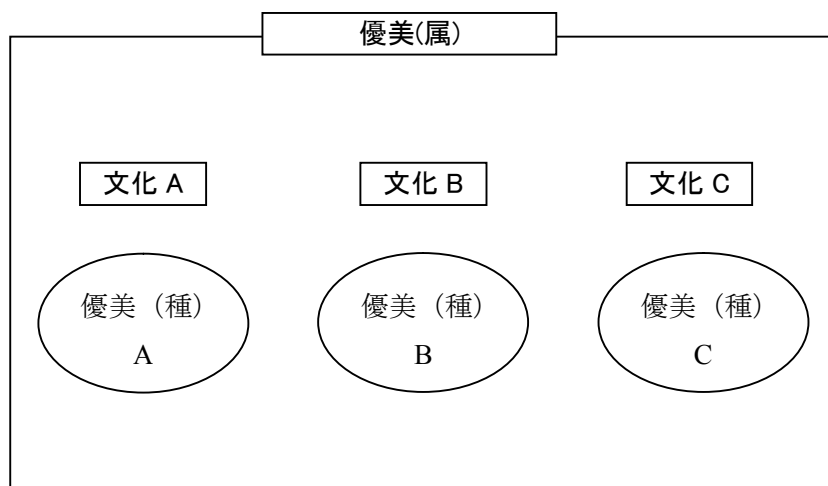


図 1 「優美」の階層性

b. 中心的な問いについて

「〔非言語的〕芸術作品には、魂の統合に関する情報が、どんなかたちで込められて（コード化されているのか？）」（拮抗括弧、引用者）



「芸術作品は、①どのような規則のもとで、②どんな魂の統合＝意識と無意識の統合＝優美を表しているのか」

この二つの問いを解くのが、この文章の目的ではないか。

2. 変換の規則とその規則が文化との間に持つ冗長性（201-206）

ここでは、人・物・神（超自然的存在）などを絵や像にするときの規則（コード）を取り上げるとともに、この規則は冗長性を持つとしている。

a. 規則（コード）

ベイトソンは、人が対象を絵や像にするときの「変換の規則」に注目する。その作品が表すテーマや象徴（この絵画の反戦をテーマとしています。この絵画のリンゴは、知恵を表しています）には関わらない。

人はある対象を絵にするときに、それをそのまま表すわけではない。何かしら変換規則にしたがって、その実物をイラストに変換することになる。そのような規則が、〇〇派、〇〇風、〇〇調と呼ばれるものである。

b. 冗長性

冗長性について

ベイトソンは、変換の規則（その規則から生み出されるものとしての芸術）には、文化との間に冗長性があるとする。

「冗長性」とは、「なんらかの出来事または物の集合体に、とにかく何らかの方法で、「切れ目」を入れることができ、かつ、そうやって分割された一方だけの近くから、残りの部分のありさまをランダムな確率より高い確率で推測できる」性質のことである。拘束・パターンと同義。

私が相手に「おはよう」と声をかけた場合、相手も「おはよう」と声を返してくれる可能性はランダムな確率より高い確率で推測できる。この場合、私の「おはよう」という言葉には、「冗長性」が含まれていると言える。私の「おはよう」が、相手が発する言葉を「おやよう」だけに拘束したとも言える。

芸術作品の特性は、文化的・心理的システムを反映するという前提にわれわれは立っている。

芸術は、それが属する文化に「ついて」のものだ、あるいは部分的に文化から「導きだされ」、また文化によって「規定される」ものだ（p204）

二つの冗長性について

ベイトソンは、このような冗長性を「バーバルな冗長性」と「イコニックな冗長性」の二種類に分ける。また、後者が前者より上の階層にくるとする（物事を言葉で説明するとき、図像的な説明—ミミズがどんな姿であるかの説明が、頭からはじめて、順々に後方へいくという図像的な順番をたどる—という風になることから）

- バーバル（verbal：コトバの、コトバによる、コトバだけの）な冗長性（コード化）

- コトバの文法。「なぜなら」というコトバからは、「～からである」というコトバが来ることを推測できる（前者のコトバは、後者のことばを拘束する）
- イコン的な（Ikon：図像的な）冗長性（コード化）
 - ジェスチャーの文法。握手をしようと手をさしのばすとき、相手も手をさしのばすことが推測できる。

3. 意識と無意識（pp.207-222）

この部分から、ベントソンの話は芸術における意識と無意識の話に移る。ここでベイトソンは、芸術における無意識の層の重要性を述べる。

チャップリン「薔薇は美しくあるために咲くのではない。ただ咲きたいがために咲いているのだ。だからこそ美しいのだ」『ライムライト』（爆笑問題 1997：148）

a. 精神（意識と無意識）の階層性について

「精神は異なった階層からなっている」ということの先行研究

1. サミュエル・バトラー：物事を深く「知る」につれて、その知識について意識する度合いが減っていく
2. アダルバート・エイムズ：視覚神経が捉えた情報から立体的イメージが作られるときのプロセスには、遠近法などの数々の数学的前提が組み込まれている。だが、そのプロセスは無意識のレベルで行われている。また、それを意識的にコントロールすることできない。
3. フロイト派（フェニエル）：芸術の様式は隠喩的なものである。したがって一次過程（無意識の段階）の進行する精神のレベルに根ざしている。
4. フロイト：無意識は、恐ろしい、苦痛に満ちた記憶が抑圧のプロセスによって押し込められた地下室である。

ベイトソンが考える精神の階層性・精神の階層性と芸術との関わり

ベイトソンがこれらの先行研究を下敷きに、意識と無意識について述べていることは以下にまとめられる。

- 無意識は、意識とは別の演算規則を持っており、その精神にとって必要不可欠なものである
- 無意識は、十分に抑えられた状態で、初めて精神システムに役立つ。そもそも、100%意識的な精神システムは無理である
- 人は、無意識的なメッセージ（キネシックス：表情、口調）に大きな信頼を抱く
- 意識は、システムを構成する中的一部分の要素しか捉えることができない。システム全体（「智」）を捉えることはできない。

これらをさらに下敷きに、ベイトソンは、芸術における意識と無意識について以下を述べる。

- 芸術とは、われわれの無意識の層を伝え合うエクササイズである
- 芸が「うまい」という事実（先のキネシックスにあたるものか）そのものが、芸術的パフォーマンスにおける無意識の要素の豊かな広がりを実証している。
- 芸術は、「智」の維持に積極的に寄与しているかもしれない

疑問・意見

- 216 ページの「芸術家が『腕』を見せるとき、彼は自分の無意識に沈めた事項に関するメッセージを伝えているのである。（ただし、それを無意識からのメッセージというのは適当でない）」（傍点を太字に変換）と述べている。なぜ、「無意識からの」とは言えないのだろうか。
- 223 ページの「バリ島絵画の分析」では、絵画に描かれる実際の構図との関わりで、冗長性が述べられている（第 1 のレベルの冗長性として正確なパターン・画一性〔均質に連続する葉っぱ〕、その第 1 レベルの冗長性を変化させながら、より大きなパターンの中に収めさせる第 2 レベルの冗長性）。文化との関わりとしての冗長性はどこにいったのか。

参考文献

爆笑問題, 1997, 『天下御免の向こう見ず』二見書房